



駅土場大火

置戸を襲った未曾有の大火



住宅12棟、パルプ材4万6千石を焼失

昭和38年5月27日、置戸町では未曾有の大火がありました。

午後10時15分ごろ、町内の出役による夜警員が市街を巡視中、日進町内の綿工場から火が出ているのを発見し消防に連絡する一方、付近の人々を叩き起こしました。火はみるみるうちに燃え広がり、12棟11世帯975平方メートルを焼いて、午後11時20分ごろ火の手はおさまったかに見えましたが、おりからの強風にあおられた火の粉が飛び散り、現場から約400メートル下手の線路向かい共同工場の丸太2カ所に火がついて、約1万平方メートルにわたって積んであったほぼ1万3千立方メートル（約4万6千石）のパルプ材を焼いて、翌28日午後1時半ごろ鎮火しました。

異常乾燥で家屋が乾ききっていたことと、強風で火の手が予想外に早かったため、罹災者48人は丸裸同然で焼け出されました。また、駅土場に延焼した火の手は、風速10メートル内外の強い風にあおられ、火の粉は高く夜空に乱れ飛んで約2キ

ロ離れた新光町内まで達し、市街住民にとっては、恐怖と緊張の日として永遠に残る10数時間となりました。

消火にあたっては地元消防団のポンプ車4台をはじめ、北見4台、留辺蘂3台、訓子府・端野・陸別各2台の合計17台、265人があたり、このほか自衛隊1台、280人が不眠不休の消火活動をして、地元営林署ほか、各木材工場施設消防隊など約400人が手伝い、婦人会が炊き出しに参加するなど、出動総数は千人を上回りました。

この火災で消防団員等十数人が重軽傷を負い、郵便局では見舞いの電話・電報が殺到して、電報だけでも平常の50倍にあたる670通の扱いがあって大混乱していました。また、鎮火後は焼けた木の処分に数十日を要しましたが、後日集計した損害額によると、家屋家財1,200万円、原木焼失分6,000万円、その他を含めて約8,000万円と見積もられています。

(参照：置戸町史下巻)

開町100周年記念事業

こども実行委員を任命

開町100周年記念事業を子ども目線で企画・運営する「こども実行委員会」が8月4日発足し、実行委員の任命式が役場庁舎で行われました。



開町100周年記念事業実行委員会では「こんな体験してみたい、こんなものを作ってみたい、こんな人と会ってみたい」という子どもならではのアイデアを反映させ、町民みんなの記憶に残る記念事業にひと、6月にメンバーを募集。今回、応募のあった置戸小4～5年生の8人を委員に決め、任命書を交付しました。

任命式終了後には早速、第1回会議が開かれ、来年の開町100周年に向けた今後の具体的作業イメージなどについて確認しました。

なお、こども実行委員会の構成員は次のとおりです（敬称略、順不同）。

【実行委員長】伊東航亮（5年）【副実行委員長】尾藤伊織（5年）、大矢深（4年）、大和谷慧七（4年）【実行委員】川岸愛梨（5年）、小山大空（4年）、小野寺颯磨（4年）、栗田桃百（4年）